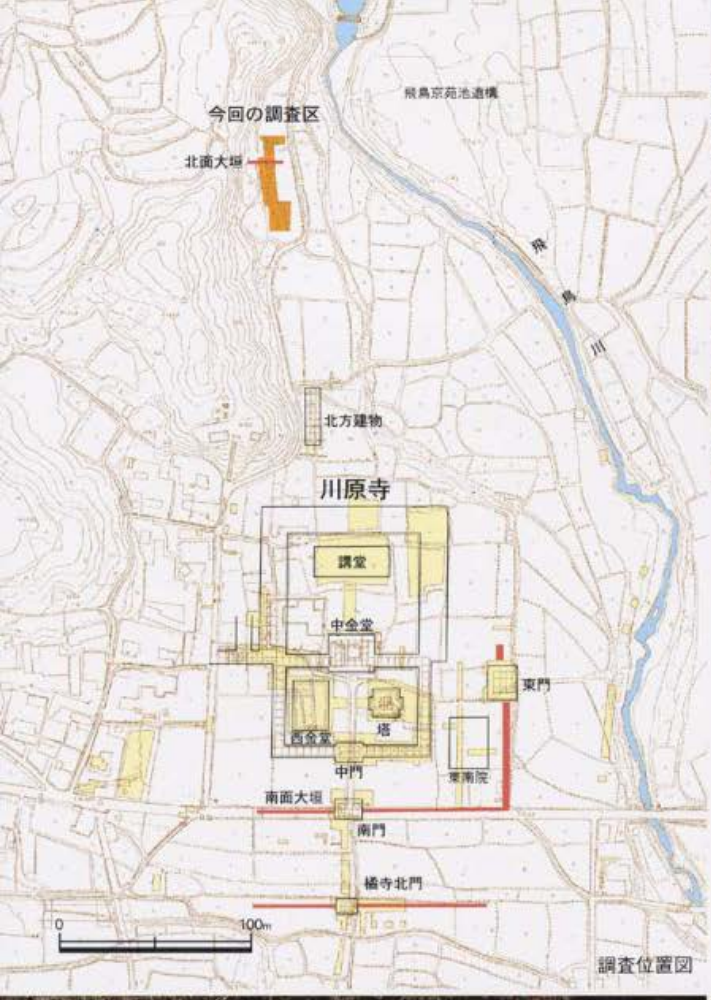
川原寺 寺域北限の調査

飛鳥藤原第119-5次調査
現地見学会資料

独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部



調査位置図

調査地上空から川原寺を望む（北から）

川原寺　川原寺は、斉明天皇の川原宮の故地に、天智天皇が母の冥福を祈って建立した寺院と考えられています。持統・文武朝（7世紀末～8世紀初頭）には、飛鳥寺、大官大寺、薬師寺とならんで四大寺に挙げられ、奈良時代にも十大寺の一つとされた格の高い寺院です。昭和32～34年に奈良国立文化財研究所が行った調査で、1塔2金堂形式の特異な伽藍配置が明らかになりました。

今回の調査　今回の園地整備事業に伴う調査の最大の成果は、川原寺の北面大垣の確認と、付属工房の発見です。

北面大垣……調査区の北端で一辺2m近い巨大な柱穴を3個確認しました。これは川原寺の寺域の北を限る区画塀、北面大垣とみられます。この大垣の発見によって、川原寺の寺域が飛鳥寺とほぼ同じ南北3町（1町＝360尺の3倍、約330m）の規模を

川原寺北面大垣（東から）

瓦窯前庭部（東から）

廃棄した瓦（北東から）

調査地から北西部・西隣石溜跡を望む（西から）

もつことが明らかになりました。

瓦窯と瓦溜……調査区中央付近にある瓦窯の前庭部には、融着した平瓦が残されており、これに続く丘陵斜面に瓦窯本体の存在が予想されます。また、瓦窯前庭部の北側の瓦溜は焼成瓦の選別場とみられ、焼き損じた瓦が大量に捨てられていました。

金属工房……調査区の全域に金属加工に関係した炉跡群が分布しています。炉跡は径20～30cmの円形で皿状にくぼみ、周囲がドーナツ状に赤変しています。大半が鉄製品を製作した鍛冶炉ですが、銅製品を鋳造したルツボも出土しています。南半部では排水用の区画溝を持つ工房テラスを確認できました。

掘立柱建物……3時期にわたる建物群を6棟以上確認しています。奈良時代の建物は柱筋をそろえて整然と配置され、倉庫風建物は東大寺正倉院を小規模にしたような双倉になります。

遺構配置図

瓦溜（南から）

炉跡（北西から）

双倉（北から）

鋳造土坑（北から）

鋳造土坑調査風景（北東から）

鋳型全景（北から）

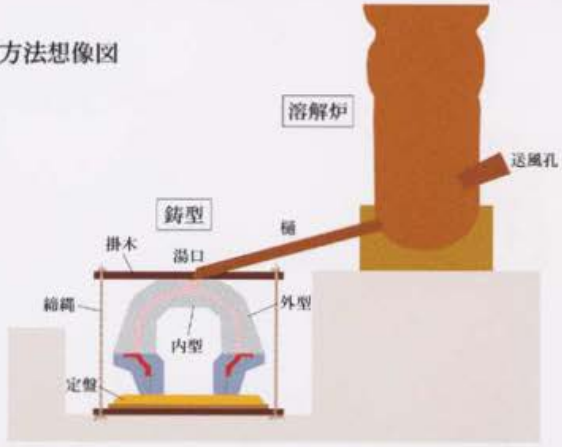
鋳型細部（東から）

溶解炉片投棄土坑（東から）

鉄釜鋳造土坑と溶解炉　調査区南半部の丘陵裾で発見した鋳造土坑は径2.8mほどの隅丸方形をした大型土坑で、真っ赤な焼土や炭、鋳型片が充満していました。掘り下げたところ、中心部から残りの良い鋳型片が見つかり、径90cmほどの大きな鉄釜を鋳造した土坑であることが判明しました。また調査区の南東隅近くには、鉄の付着した土製の溶解炉（コシキ炉）片が一括投棄されていました。溶解炉を設置した場所は特定できませんが、一段高い丘陵テラスに溶解炉を据え、高低差を利用して下の鋳造土坑に鉄を流し込み、作業後に溶解炉を解体したものと考えられます。鋳造土坑と溶解炉の年代は７世紀末頃とみられ、これまでに発見された鋳鉄の遺構としては最古のものです。

天平年間に作成された法隆寺や大安寺の資財帳（財産目録）には、数多くの鉄釜が見えますが、今日に残る品はありません。今回の発見は、そうした古代の鉄釜の形状や製作方法、鋳鉄技術の系譜を解明する上で大変重要な発見です。ここで鋳造された鉄釜が川原寺でどのように使用されたのか、様々に想像が膨らみます。

鋳造方法想像図



まとめ　今回の調査により、川原寺の北面大垣の位置が明らかになるとともに、寺域北部に伽藍の建設や営繕のための工房群が配置された様子が明らかになりました。工房の立地や構成は飛鳥池工房遺跡とよく似ていますが、川原寺の工房の存続時期は７世紀後半の創建期から平安時代後期におよびます。今回の発見は、古代寺院の規模や寺域内の様子、付属施設のあり方を考える上で、貴重な発見といえるでしょう。

2003年6月

EDITED BY K.MATSUMURA・T.INOUE・A.OKADA